

11. 「枕草子」『宮に始めて参りたる』第一・第三段落

清少納言

【概要】

時は夜明け前、作者は帰ろうとするが、中宮は引き止める。明々なる前に白晝に戻りたい気持ちがある。

【語意】

下りなむ・・・私室に退出して井おひ
葛城の神・葛城山に住む醜い容貌の神。容貌を恥じて夜だけ働く伝説の神(教) 脚注参照
仰せ・・・おしこやゑ

いかでかは筋かひ御覽せらねむ・・・いひつて斜めにても顔をじり覽ならねむか、御覽にならねむ。

御格子も参ります・・・格子をお上げする
放し・・・(格子を)上げぬ
まな・・・だめだ

下りまほしうなりたたらむ・・・部屋に下がらなくなつてしまつてさうなむか
夜たりの・今夜

みゆの隠ゆるや遅む・・・隣行(こつこつ)して姿を隠すや遅む
をかし・・・趣き深く

あらはにもあるまじ・・・丸見えではあるまじ
召せば・・・お呼びになる、お召になる

なのみやは籠りたらむとする・・・そなたに引込込ではかすべしとするのか。
あへなき・・・あつたはらばと容易に

なのおぼしめすやうこそあらぬ・・・そのやうにおおそれるわけがあるのか。
思ふにたがら・・・意回し背へ

あれにもあらぬ心地・・・無我夢中の気持ち

【語意】を第二第三段落の本文の左隣に記入の上、現代語訳をしよう。

(右隣は読み)

☆文脈に即して推測力を生かして現代語訳すべ。

音読は三回以上はしましよな。古典は音読大事ですよ。

